

# Vormärz における社会主義

— W. Weiting の思想と位置を中心にして —

広 実 源 太 郎

【要約】 本稿においては、三月革命を前提として、ドイツに社会主義、労働運動がどのような途をたどつて、どのような層によつて、如何なる形で入つてきたか、またそれは如何に修正されていつたかを問題とした。左翼思想および労働運動の起源が、直接には三月革命に、間接には広く統一と自由の問題に結びつき、十九、二十世紀のそれを或程度決定すると考えたからである。この場合、初期社会主義の中心人物であつたヴァイトリンクと彼の著作を通じて考察する方法を採用した。十九世紀の三、四十年代におけるドイツは、資本主義の後進性の故に近代のプロレタリアを欠く。ここにその現実から、手工業職人が中心となり、しかも彼らの修業、求職の關係から、パリがドイツ社会主義の学校になり、その教師はユートピア社会主義者である。ヴァイトリンクはユートピア社会主義者と基本的に異なる階級性の上に立つものであるが、いづれにしても、手工業職人・パリ・空想主義を要素としてドイツに流入される社会主義の頂点に立つ者であり、フランスおよびドイツの小ブルジョアの社会主義と鋭く対立する。しかしながら、その本質はあくまでも前プロレタリア的な手工業職人のそれであるため、プロレタリアートの組織、マルクス主義からは脱落を余儀なくされるのであり、それが彼らの限界でもあつた。三月革命に際しては、小ブルジョアと第四階級の不一致、更には第四階級内の、手工業者とプロレタリアの対立があり、それが革命を未成熟たらしめる、という展望をそえた。

## 一、はじめに

十九世紀中葉におけるドイツは、経済的に明かに後進的

であつた。しかしながら、同時にこの時期は資本主義的工業の成立期であることも認めなければならない。一八三四年に成立した関税同盟がこの傾向を促進した事も論をまた

ないところであり、一八一六年には全住民の七八パーセント、四九年には六四パーセントをしめしていた農業従事者が六七年には四八パーセントに減少し、<sup>①</sup>逆に、工業に従事する者は四六年には一一二人に一〇人の割合であつたのが、七一年には九三人に一〇人の割に増加してゐるし、商業従事者も四十年から九十年代にかけては三倍近く増加してゐる。<sup>②</sup>これらの現象はゾンバルトなどのいう von Agrarstat zum Industriestat, Neugestaltung des Wirtschaftに当るものであり、ドイツ・ブルジョアジーの、後進的範疇における抬頭を意味するものに他ならなかつた。一八四八年に生じた三月革命も、これを前提としたブルジョア革命として把握すべきものと思われる。

しかしながら、この事から、ドイツがイギリスの如き工場制機械生産の段階に入つたものと考えるのは避けなければならぬ。三月革命当時のドイツは、本質的には農業国であつて、それによつてユンカー層が支配権を握つていた。農民解放は不十分な結果に終り、四九年の統計によれば、僅か一・六パーセントの大土地所有者が、全プロイセンの全所有土地の約半分、四五、一九二、五五〇モルゲンを所

有している。<sup>③</sup>工業的な面からいえば、ツンフトの遺制が存在し、手工業 Handwerk がその中心をなしていた。勿論、リストをして Das Wort Rhein ist Leben; das Wort Rhein ist Grosse; das Wort Rhein ist Macht und Kraft <sup>④</sup>といわしめたライントラントのような高度の産業地帯も存在したが、それはむしろ例外というべきであり、殊に東ドイツにあつては、それはまだ多かれ少なかれ封建的泥沼の中を抜け出てゐなかつた。

要するにロッシャー、ゾンバルトら以来、三月革命にいたるまでの、ドイツ工業の把握の仕方は、なお手工業が中心であるとみてゐるのであり、ヴァルター・スハウゼンは就中この点を強調し、「ドイツ工業生産の基本は手工業が形成してゐた」としてゐるのである。

右に述べたところにより得られることは、三月革命にいたるまでのドイツには、言葉の本来の意味でのプロレタリアートや労働者が僅かしかいなかつたという事であり、むしろ過渡的な過程の中で、封建遺制と新興ブルジョアジーから二重の束縛をうけた下積みの階級があつたという方が事実に近いであらう。「四八年のドイツには階級意識をも

つたプロレタリアートはまだ存在していない。勿論労働者というものは存在したが、数の上からすれば農民や手工業者より遙かに少い。社会学的にみた場合、この新たに形成された第四階級には種々の要素が混在していたのである。」<sup>⑤</sup>  
ドイツの労働運動や社会主義の開始は三月革命の直前と解してよいのであろうが、それは以上のような前提のもとに始められたということをはなさないのではなからうか。

註

- ① L. Pohle; Die Entwicklung des deutschen Wirtschaftslebens im 19. ghr. s. 19
- ② W. Sombart; Die Deutsche Volkswirtschaft im Neunzehnten Jahrhundert, 1919. S. 276
- ③ ibid. S. 220
- ④ H. Kammitzer & 「十九世紀の前半に、ドイツは封建的農業地 封建的農業 Agrarland から資本主義的工業地 kapitalistische Industrieland への過渡の様相を呈した」といっている。(Die wirtschaftliche Struktur Deutschland zur Zeit der Revolution 1848. S. 3)
- ⑤ Kammitzer; a. a. O. S. 6~7.
- ⑥ List Gesamtle Schriften, herausgegeben von Häusser. Bd. 2. S. 242

① A. S. von Waltershausen; Deutsche Wirtschaftsgeschichte, 1815 bis 1914. 1955. S. 17.

② R. Stadelmann; Soziale und politische Geschichte der Revolution von 1848. S. 155.

## II. Bund der Gerechten の成立

以上の如き状況からいつて、ドイツ国内に労働者の組織が確立される可能性はほとんどなかつた。そしてドイツの労働者組織はドイツ外の地で成立をみたのである。そのもつとも意味深いものが、一八三六年、パリで成立した「義人同盟 Bund der Gerechten」である。

当時のドイツ手工業職人 Handwerksgelesen は、一つには職をみつける為に、又一つには自分の腕をみがく為に国外、特にフランス、スイスなどに出かけることが流行の如くなつていたが、三、四十年代の、いわば半封建的なドイツから出て、西ヨーロッパの先進的な空気にふれることによつて、次第に新しい社会制度に接し、進歩的思想を識り、さらには旧い自分達の社会を批判する眼を開かれていった者が少なくなかつた。もつとも彼らはそれを論理的に受入れたのではなく、或る雰囲気の中で、体験的に識つた

にとどまることと、ドイツ社会がそれらを受入れる条件に欠けていたために、彼らが彼らのいわゆる修業を終えて故国に帰国した際には、その影響はほとんどとるに足りない範圍のものであつた。それが国外において組織化され、理論的になつてくると、ドイツ社会の進歩とともに、余程、事情が異つてきたといわねばならない。<sup>③</sup>

国外における進歩的団体の組織は、しかしながら、当初は手工業職人の手によるものであつたのではなく、ウィーン体制下にあるドイツ諸邦で、民主主義、共和制を主張した、西南ドイツ出身者を中心とした左派急進主義者 *Linksradikalen* とよばれる人々が、追放され、亡命してパリやスイスにいたが、それらの人を中心に形成されたのである。これら政治的亡命者は、労働者自身による労働者組織に先立つて、思想的な団体を結成している。例えば三二年に成立した「ドイツ人民連合 *Deutsche Volksverein*」、三三三三三三年結成をみた「青年ドイツ *Jungen Deutschland*」などがそれである。<sup>④</sup>そしてその代表的なものが「亡命者秘密同盟 *Geheimbund der Geächteten*」なのである。

「亡命者秘密同盟」はヘッカー J. P. Becker の牢獄襲

撃を機会として三三年に成立をみ、三四年から三六年にかけて活動するものであるが、この同盟の性格は前記の諸団体と同様に、基本的には、すぐれて小市民的であることを指摘しうる上に、共和制ドイツの実現をめざす、純政治的目的をもつものであつた。<sup>⑤</sup>

「義人同盟」は「亡命者秘密同盟」から分裂して結成された。「亡命者同盟」内の、小市民的、共和主義的、民主主義者とプロレタリア的分子の対立は、すでに、三四、五年にみうけられるのであるが、三六年にいたり、テオドル・シュスター T. Schuster は、当時のフランスにおける急進的革命家ブランキの影響をうけ、ブランキイズムを率ずるカール・シャッパー K. Schapper らと共に同盟を出て、新たに「義人同盟」をつくつたのである。

「義人同盟」の成立はドイツ社会主義運動史上画期的な意味をもつ。それは小市民的インテリ階級、つまり思想家、政治家、革命家などの指導の手をはなれ、手工業職人を中心としたプロレタリア的団体がパリに生れたことを物語る。エンゲルスは「一八三四年、パリで、ドイツ人の亡命者の手で亡命者民主共和主義的な秘密同盟がつくられたが、

一八三六年になつて、この同盟のなかのもつとも急進的な、多くはプロレタリア的な分子は、この秘密同盟からわかれて、あらたに秘密の義人同盟をつくつた<sup>①</sup>とスケッチしてゐる。三六年をもつて、ドイツ労働者運動の、独立的な最初の時期とする所以であるし、「共産主義者同盟」は「亡命者秘密同盟」から直接するのではない。その為に「義人者同盟」のもつ意味は深いものがあるといわなければならぬであらう。<sup>②</sup>

「義人同盟」は「亡命者秘密同盟」と袂別し、プロレタリア的な階級性の上に、ブランキ主義を採用し、理論的にはフランス空想社会主義を学び、特にバブーフ流の革命論を戦術として採用していつた。この結果、財産の共有が要求され、必然的に「平等」を打出し、ドイツ語による社会主義的文献を作製していくことになつた。<sup>③</sup>その代表的なのが、一八三八年、パリで出版されたヴァイトリンクの「人類は如何にあり、如何にあるべきか Die Menschheit, wie sie ist und sein sollte」である。<sup>④</sup>「義人同盟」の同志はその後、一八三九年五月十二日のブランキの暴動に参加し、多くの者が捕えられ、拘留された後に追放され、スイス、

イギリスに亡命した。ロンドンにのがれた者の中、ギーゼンの大学で山林学を学んだシャッペー、ケルンの時計工であつたモル、Moll、靴工のハインリヒ・パウアー H. Bauerらが中心になり、「義人同盟」のロンドン支部ともいふべき秘密同盟を組織し、四〇年二月にはそれを「ドイツ労働者教養協会 Deutsche Arbeiterbildungsverein」に改組してゐる。この協会の指導者達はチャーティストの仲間であるハーネイ、ジョンズらと連絡をとりつつ、さらにポーランド、フランスの革命家、民主主義者と結び、四五年九月にはそれをインターナショナルな性格に組みかえていつてゐる。<sup>⑤</sup>この時期になると、パリの「義人同盟」は事実上解消してしまい、ドイツ、スイスに、その支部的な労働者のグループが出来、殊にヴァイトリンク、ベッカーらが活動したスイス——ジュネーヴ——の支部は注目すべき活躍を示しているが、パリに代つてロンドンがその中心になつてくる。と同時に、「同盟はドイツの同盟から、しだいに國際的な同盟」<sup>⑥</sup>としての特徴を示すようになってくる。「義人同盟」は理論的にも組織的にも、しだいに成長していつたのである。この期間に、この組織の理論的な指導者とし

て活動したのが「ドイツ社会主義の父」といわれ、ザムエル・ヴァイトリン W. Weitling によつた。

註

① この時代、自由主義、民族主義、就中社会主義史上、ハリのもつた意味は大きい。各国の社会主義者は「社会主義的な考へ方の芽が空気の中心に、呼吸する毎に存在した」(F. Mehring; Vorwort zur Jubiläumsausgabe der „Garantien der Harmonie u. Freiheit, Berlin 1908, S. 265) ハリに集り、ハリはヨーロッパの新しい運動の中心地となり、反政府的、革命的勢力ののがれ場所、集合地となつてゐた。

② 「義人同盟」の目的は在ハリ手工業職人の組織を通じての啓蒙とプロバガンダにあつた。そして彼らが帰国した際、その思想を拡めてくれるのを期待してゐた。事実ヘルリン、マッテンルタ等にその支部が形成され、目的の一部は達せられてゐる。

③ F. W. Potjomkin u. A. I. Molok; Die Revolution in Deutschland 1848-49, übersetzt von W. Meyer, S. 20 など  
 「青年ドイツ」は「青年ヨーロッパ」と密接な關係をもつ。二十年代にイタリアのカルボナリ運動がフランスに入り、サン・シモンの忠実な弟子、バザール Bazard がこれを組織化した。三十年になるとマッチャーニにより、バザールの組織を利用してマルセーユに「青年イタリア」がはくられた。「青年ドイツ」はこれを真似て組織された政治的結社であり、従つて「三四年マッチャーニがスイスでつくつた「青年ヨーロッパ」の一支部の如きものとなつた。(B. Kaufhold; Einleitung zur Akademie-

Verlagsausgabe der „Garantien der Harmonie u. Freiheit, Berlin 1955 S. X)

④ F. W. Potjomkin u. A. I. Molok; a. a. O. S. 20. K. Obermann; Die Deutschen Arbeiter in der Revolution von 1848, S. 50

⑤ 前記③の「青年ドイツ」の例をみよ。

⑥ F. W. Potjomkin u. A. I. Molok; a. a. O. S. 22.

⑦ F. Engels; Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten (ヤルクス・ヘンゲルス選集【大月書店】第二卷下、四二八頁【共產主義者同盟の歴史】)

⑧ K. Obermann; Die Deutschen Arbeiter in der Revolution von 1848, S. 50.

⑨ F. W. Potjomkin u. A. I. Molok; a. a. O. S. 45.

⑩ この同盟の建設者であるマヌスター、シャマバーがフランス主義者であり、その故に「亡命者同盟」と離別したといつてゐる程であるから當然の結末である。三八年「フロンキギ」など、Barbès の「季節タリオン Société des Saisons」や「三九年の暴動にも同一行動をなすのべきである。(K. Obermann; a. a. O. S. 50~51.)

⑪ F. W. Potjomkin u. A. I. Molok; a. a. O. S. 46.

⑫ Ibid. S. 47. fs.

⑬ ヤルクス選集二卷下、四三三頁。

以上のべてきたように、ドイツの労働者運動や社会主義は、主としてパリにおいて、在外手工業職人を中心として、空想的社会主義の影響下に、いわゆる「出稼ぎ職人の共産主義 *Kommunismus der emigratische Geselle*」として出発し、その中心地がロンドンに移行するとともに、マルクス、エンゲルスの説をとりいれ、次第にインターナショナルな性格をもつにいたつたのは注目されるべき点であると思われる。そしてこの時期の、わけでもマルクス、エンゲルスが出現するまでの時期を通して、組織の理論的な、そして又現実の活動面でも、その中心人物として、特異な位置をしめたのがヴァイトリンク<sup>①</sup>である。

ヴァイトリンクは「ドイツ社会主義の父」とさえいわれている人であるが、わが国ではほとんど紹介されていなかつたといつてもよい。ドイツにおいては、彼に関する研究や彼の思想に言及したものが、必ずしも少くはないのであるが<sup>②</sup>、従来、その多くは、彼を単なる、科学的社会主義者の出現に先行した空想的社会主義者 *Utopist* として、彼

の特殊な位置に注目しようとしなかつた。エンゲルスは彼の「空想から科学へ」の中で、「空想的社会主義者達の考え方は、十九世紀の社会主義的な観念を長く支配してきた。そして部分的には今もお支配している。ごく最近にいたるまで、フランスとイギリスのあらゆる社会主義者達はこの考え方を奉じていたし、ヴァイトリンクを含む、初期のドイツ共産主義もまたその仲間に入つていた。彼らにとつては、社会主義は絶対的真理、理性、正義の表現であり、それが発見されさえすれば、それ自らの力で世界を征服することのできるものとした」といつて、空想的社会主義を批判すると同時に、ヴァイトリンクをその列に加えた。以来、彼はフリーエラストであるとされ、オーウェン、サン・シモン、カペー等の思想の残滓者として定説づけられてきた<sup>③</sup>。

私も彼の思想を空想的社会主義の範疇においてとらえることに、基本的には同意する<sup>④</sup>。それにもかかわらず、エンゲルス以来の、彼に対する評価については疑問をもつものである。すなわち、彼を単なるフランス空想社会主義者のエピソードであり、それをドイツに移植したものとど

めることは、彼の解釈を誤っているのではなからうか。確かに彼はサン・シモン、カペー、フリーエ、ブランキ、バブーフを学び、それが彼に与えた影響の大きかつたことは否定できないであらう。しかしながら、社会主義そのもののとらえ方は、彼に思想を教え与えた人々とは本質的に異るのではないであらうか。マルクス主義と彼との間を、彼を空想主義者の側におしやることによつて、断絶的にとらえることが正しいかどうかは再検討を必要とする。結論的にいうならば、私は彼をよりマルクスの線に近い人とみ、空想的社会主義と一般によばれる人達と彼との異差を強調したいと思うのである。ドイツ労働者運動の独自の展開は義人同盟の成立によつて始められ、共産主義者同盟は亡命者秘密同盟からではなく、義人同盟から發展してくることは、すでにのべたが、この経過は、義人同盟の中心的な人物であるヴァイトリンクの解釈に微妙な関係をもつてくるし、彼とマルクス主義との間に越えることのできない断層を設けては、この経過が非論理的になると思うからである。

ヴァイトリンクは一八〇八年、マグテブルクにフランス人を父に、ドイツ人を母として誕生した。フランスから学

ぶことの多かつたドイツにとつて、彼の血統の中にフランス人の血が混つていたのは偶然ではないかもしれぬ。父は元来労働者であつたようであるが、一八一二年、ナポレオンの軍に投じ、モスクワ遠征に参加して帰還しなかつたといわれている。四歳にして父を失つた不幸な混血児は、母の手によつて、貧困の中に成長し、仕立屋職人となつた。その後マグテブルクをはなれ、ライプツィヒ、ウィーンを放歴し、三五年、パリに出てきている。彼の放浪は「当時の手工業職人達の習慣に従つて」<sup>⑦</sup>、裁縫職人としての腕をみがくことを目的としたものであつたが、ライプツィヒ時代に、一種の革命詩をつくつているところをみると、パリに來る以前から社会的関心をもつていたものと想像される。

パリに出た彼は、当時在フランス、ドイツ人の中で最も多数であつた仕立職人との交りを通じ、三五年十月には「亡命者秘密同盟」に加わり、同盟の一員としてフリーエ、サン・シモン、オーウエン、カペー、ブランキ等を学び、社会主義思想の洗礼をうけたのであるが、就中彼の興味をひいたのはバブーフのそれであつたらしい。「義人同盟」が設立された時には、その主要な一員として活躍する程に



なつていたが、三六年四月、パリを離れてドイツに帰り、  
ウィーンにわたつて三七年九月、再びパリに帰るまで、同  
盟と離れていたの、彼のドイツ・プロレタリアートの最  
初の、独自の理論家としての活動を開始するのは、厳密に  
はそれ以後に属する。いづれにしても、七月革命後の、特  
異な雰囲気をもつたパリ——それもリヨンの労働者一揆の  
直後の——に出たことは彼の生涯にとつて決定的であつた  
といわなければならない。彼は社会主義者としての理論  
的、実践的活動に入るとともに、腕をみがく為にパリに來  
り、社会的批判の眼を開かれ、啓蒙された一群のドイツ人、  
出稼ぎ職人の間で尊敬されだし、義人同盟の中核的人物と  
して成長していつた。彼の加入によつて、義人同盟は亡命  
者同盟の残滓を洗いおとし、階級性を確立し、共產主義的  
傾向を強く打出し、亡命者同盟とはちがつた基礎において、  
共和主義的プロバガンダを明確にもつところの民主的組織  
になつていたといわれる。一言にしていえば、亡命者同盟  
の分裂によつて成立した義人同盟をして、亡命者同盟と異  
る性格のものとして成長させていく上に、大きな功績があ  
つたのである。

かくして一八三八年、パリで彼の最初の著作 *Die Menschheit, wie sie ist und sein sollte* が出版<sup>④</sup>されているが、  
この書には彼の主著である「調和と自由の保証 *Garantien der Harmonie und Freiheit*」の主要な考え方が示され  
ている。<sup>⑤</sup>

一八三九年五月、ブランキ一揆の陰謀に加担した義人同  
盟の同志、シャッパー、バウアーは捕えられ、ロンドンに  
亡命し、同盟は事実上四散することになつた。ヴァイトリ  
ンクはこの際、ブランキ一揆に加担せず、同志の亡命後も  
パリに留り、同志の獲得、組織の再編成に腕をふるひ、実  
際上の最高責任者として、行動力の上でも頭角をあらわし  
ている。しかしその活躍にもかかわらず、同盟の再建が不  
可能であり、ルイ・フィリップ政府の弾圧も次第に厳しく  
なつてくるのをみた彼は、四一年五月、その前年に一度訪  
れたことのあるスイスに赴き、ゲンフ、ヴェヴェイ、ベル  
ン、チューリヒ等における多彩な行動を開始するのである。  
スイスはマッテーニが「青年ヨーロッパ」を組織した地で  
あり、従つて「青年ドイツ」の名残りが掩つていた。それ  
は反ウィーン体制的で、新しいヨーロッパの息吹ではあつ

たが、基本的にはブルジョア民主主義の線にそるものでもあり、本質的に社会主義運動でなかつたばかりでなく、反共産主義運動でさえある。この運動の理念の中には空想社会主義的なもの、殊にフリーエの教義が入つていたといわれる。しかるに、スイスに遊んだドイツ手工業職人は、多くその影響下に入つていた。<sup>⑩</sup>

「青年ドイツ」に対抗することを直接の目標として、ヴァイトリンクの実践的活動は最高潮に達した。シモン・シムニット S. Schmidt、アウグスト・ベッカー A. Becker、セバステイアン・ザイラー S. Zeller、さらに二人のドイツ人、ペーターセン Petersen、クリスティアンセン Christianensen をひきつれ、彼はゲンフにおいて新しい組織を基礎づけ、週間紙「Hilferuf der deutschen Jugend」の編集に従事した。<sup>⑪</sup> マール、デレック、シュタンダウ等に指導された「青年ドイツ」に対する公然たる挑戦は開始されたのであつて、それを通じて共産主義的同盟の基礎を固めるに一応の成功をみたのである。「Hilferuf der deutschen Jugend」が在スイス、ドイツ職人を対象にしたものであるとするならば、四二年、ヴェヴェイで出版された雑誌

「Die junge Generation」はスイス市民を対象にしたものといふべきであらう。「すべての者の利益を損う個人の利益に反対し、個人をしめだすことなく、すべての者の利益の為に」<sup>⑫</sup> をモットーとしたこの雑誌の力を借り、ヴェヴェイでも新たな労働者組織をつくり、スイス市民をも含めて約千人に近い同志を獲得し、プロパガンダ、アジテイション等を心得た職業的革命家の育成にも或程度成功した。<sup>⑬</sup>

主著 *Garantien der Harmonie und Freiheit* はこうした実践活動のかたわら書かれ、出版されている。この書が一八四二年に出版されると、たちまちの間に手工業職人、労働者のバイブルの価値をもつようになり、当時としては珍らしく広く読まれた。それは初版以後、四五、四九年に版を重ねた程であるし、後に出版した *Das Evangelium der armen Sünder* <sup>⑭</sup> とともにフランス語、英語、ノルウェー語、ハンガリー語に翻訳され、労働者一般の古典となつてゐる程である。「仕立職人ヴィルヘルム・ヴァイトリンクは一躍有名人となつた」<sup>⑮</sup>。「この書的作用は異常な程大きかつた。ロンドンやパリからも賛意を表した手紙がやつてきた。ただに義人同盟の同志からだけでなく、多くの

進歩的感覚の知識人もまた市民的立場から、この偉大な業績について承認することを語つた。<sup>④</sup>「彼がスイスに赴くに際して、パリの義人同盟を托したエヴァーベック Everbeck は、ブルンチュリの語るところによれば、パリの労働者の間で、労働者の勝利をもたらすものとして評判になり、グヴァイド・シュトラウスのイエス伝 Dr. D. Strauss, Leben Jesus が出版された時の如く反響があつたと報告してゐるし、<sup>⑤</sup>フォイエルバッハは彼に最高の注意と尊敬を送り、「この仕立職人の見解と精神に如何に驚かされたことか！ 実際彼は彼の階級の予言者である」として、アカデミックな学徒が仕立職人の前に顔色なきを告白せねばならなかつた。<sup>⑥</sup>ハインのような、彼とははつきり区別されるべき人てさえも、「ドイツ労働者の問答示教書」、「才能の人」と賛辞をおしまなかつたし、マルクスも一八四四年 *Pariser Vorwärts* 紙上で、「ヴァイトリンクの *Garantien der Harmonie und Freiheit* 如き作品を、ドイツ・ブルジョアジーは彼らの哲学や書きもので、ブルジョアジーの解放について、その政治的解放を何処で果したであろうか」と高く評価してゐるのである。

しかし彼の頂上期も、一八四四年 *Das Evangelium der armen Sünder* の出版の頃を境として、急速に変化して行く。さしも自由なる国スイスにおいても、この書は神聖冒瀆、不敬、共產主義秘密同盟の設立をアジるものとされ、罪に問われて一年の禁錮刑<sup>⑦</sup>に処されて後、国外追放となつてプロイセン当局に引渡された。プロイセンに帰つた彼は、兵役に服することを忌避し、プロイセン当局もまた、この危険きわまりない人物が軍隊に与える共產主義を秘かに恐れたので、逃れてロンドンに赴くことができた。華かな活動を胸にえがいてロンドンに渡つた彼を待つていたのは、しかしながら、も早や彼の時代がすぎ去つたという事態のみであつた。単なるドイツ人の組織から、インターナショナルの性格に遷り、シャッパー、モル、バウアーの指導力は失われ、マルクスとエンゲルスがそれに代つていた。それは指導者の交代にとどまるものではなく、もつと本質的な変化というべきであらう。義人同盟のイデオロギーは、もはやヴァイトリンクの見解を古びたものとして退けた。<sup>⑧</sup>ロンドンにおけるマルクスと彼の討論はそれを示すものに他ならず、彼は敗北して行くのである。<sup>⑨</sup>

その後、彼は各地を転々と放浪して歩いたが、四七年、ニューヨークに渡つた。四八年三月、ドイツに革命がおこると、彼は直ちに帰国したが、「もはや大した人氣もなく、革命の年には何処にも出歩いていかなかつた。ヴァイトリンクが四八年の初夏、ベルリンにやつてきた時、ベルリンの労働者会議は彼の激励文をすら、ほとんど恐れさうようにして拒絶した。……ヴァイトリンクが発行した *Der Utw-ehler* はベルリンとぞの近郊で一五〇人の購読者を得たにとどまり、数号の後廃刊になつた。」彼は今や全く過去の人であり、敗残の人といわねばならず、四九年には再びアメリカに向わねばならなかつた。アメリカでも社会主義的な雑誌、新聞、パンフレットの発行、一種の共産村の建設を行い、これらに失敗してからは、工学、天文学等を趣味とする一仕立屋にかえり、鉤孔つくりのミシンの發明、天文学体系の考察に熱中し、一時教壇に立つたこともあるが、七一年にその多彩な波乱多い生涯をとじている。

註

① 普通 Weiting とかへが *Allg. Deutsche Biographie* にあるれば、はじめの頃には Weiding とかいてゐた。

② 簡単なものとしては、例えはラズニキ「共産党宣言」の歴史的

序説」(山村喬訳) 一頁以下。

③ 古くは J. C. Bluntshli; Die Kommunisten in der Schweiz nach den bei Weiting vorgefundenen Papieren, Zürich 1843. S. Seiler; Der Schriftsteller W. Weiting u. der Kommunistenäm in Zürich, Bern 1843. W. Marr; Das junge Deutschland in der Schweiz, Leipzig 1846. E. Kaler; W. Weiting. Seine Agitation u. Lehre, Hottingn-Zürich 1887. J. Fröbel; Ein Lebenslauf, Stuttgart 1899. H. Schüfter; Die Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung in Amerika, Stuttgart 1907. F. Mehring; Einleitung zur Jubiläumsausgabe der „Garantien der Harmonie u. Freiheit“, Berlin 1908. ders; Geschichte der deutschen Demokratie Bd. I, Stuttgart 1919. F. Mücke; Die grossen Sozialisten Bd. II, Leipzig 1919. E. Barmikal; Weiting der Gefangene u. seine „Gerechtigkeit“, Kiel 1929. K. Mielke; Deutscher Fröhsocialismus, Stuttgart 1931. 等があるが、但しそのほとんどは今日入手することが不可能に近う。最近のものは K. Obermann; Die Deutschen Arbeiter in der Revolution von 1848, Berlin 1950. E. Schraepfer; Quellen zur Geschichte der sozialen Frage in Deutschland, 1800—1870, Göttingen 1955. 正確な資料は E. Brennecke; W. Weiting, Am Tor der Zukunft, Berlin 1956 であるが、その中に保証するべきものがある。Garantien der Harmonie u. Freiheit が一九五五年 B. Kaufhold の Einleitung へ An-

merkungen 及び in Berlin から出された。その Einleitung はあつて述べられたものである。

④ 例えば Stadelmann は「モリスムのネーション派のなされたこと」(Soziale u. politische Geschichte der Revolution von 1848, S. 161) などによるが、Mehring, Vollen-der にしても、その既述社会主義の導入者としての価値しか認めようならぬ。その理 R. Huch; Alte u. neue Götter 及び St. Simon とそれについての理解については。

⑤ Schraepfer; Quellen zur Geschichte der sozialen Frage in Deutschland 1800—1870, S. 16. K. Vollender; Von Machiavelli zu Lenin, S. 214fs

⑥ Brennecke は「それからモリスム時代までを彼の「頂上期」としてとらえる。ヴァイトリンクは大きな希望をもちつて、革命直後のソートに來たのと同じく、彼の社会的関心はそれ以前から、相當な程度にわたるのと同様である。(Am Tor der Zukunft, S. 69fs)

⑦ F. W. Potjomkin u. A. I. Molok; Die Revolution in Deutschland, 1848—49 S. 21.

⑧ B. Kaufhold; Einleitung, S. IX

⑨ ibid; S. IX—X.

⑩ これは同盟員の要請によつて、執筆され、出版されたものである。

⑪ Kaufhold; a. a. O. S. X

⑫ ibid; S. XI fs.

⑬ ibid; S. XV. Brennecke, a. a. O. S. 77.

⑭ F. Mehring; Geschichte der deutschen Demokratie, Bd. I, S. 104

⑮ Hilferd der deutschen Jugend は最高千部の発行を「ソート四回、モリスムに巨額を送るはらになり、七百五十人のドイツ人同志の他に、モリスム人も加入して来た。」

⑯ 後述 Das Evangelium eines armen Sünders と致す。

⑰ Brennecke; a. a. O. S. 97.

⑱ ibid, S. 99.

⑲ J. K. Bluntschli; Die Kommunisten in der Schweiz nach den bei Weiting vorgefundenen Papieren, S. 48.

⑳ Brennecke; a. a. O. S. 100.

㉑ Kaufhold; a. a. O. S. XVII, XVIII.

㉒ Brennecke; a. a. O. S. 110.

㉓ Potjomkin; a. a. O. S. 47—48.

㉔ その討論の内容は Brennecke; S. 122fs にくわしう。なお彼がモリスム時代のドイツ人新聞「Volkstribun」及びその編集者 H. Kriege に対する非共産主義とする四六年五月の非難決議なども「マルクス、エンゲルスを含む八人の中で唯一人反対した。ヴァイトリンクはクリーゲの「兄弟」ときめつけられている。(マル・エン選集、第一巻上、一七三頁以下及び二二五頁參)

㉕ Stadelmann; a. a. O. S. 161.

㉖ これをもちつて、彼はモリスム以来のものと言負している。

㉗ なお彼の新宗教の設立については稿を改めて考へたい。

四、ヴァイトリンク——その思想——

しからば義人同盟の変質とともにおき去られ、三月革命というブルジョア革命において用なきものとなつていつた彼の理論、思想の本質はどのようなものであつたか。又、彼は如何なる点で空想的社会主義者と区別されるべきかという問題が出てくるが、これに先立ち、まず彼の思想の概略をながめてみたい。この点に関して、彼は多くの著作、パンフレット、論文を書いているが、その核心となるべきものは *Garantien der Harmonie u. Freiheit* であるから、これを中心に考えていくのが至当であらう。

*Garantien* は今日においても残つてゐる素朴な未開社会の例から始められる。「そこで少年時代を生き、遊び、笑い、苦しむ、楽しむ。自然がさしめす途より他には法則も邪魔ものもない」、そのような世界。人類の歴史もこのような状態から始まつた。自然は人類に必要なものを必要以上に供給してくれた。「自由と独立の中に、人間はすべて生活した。」しかしそれは次第にくずれてくる。やがて遊牧生活の中から「俺のもの、お前のもの *Mein u. Dein*」

という言葉が生れてくる。はじめは単に「この羊は俺のものだ」といつた調子で用いられるにすぎず、その言葉の意味すら相手には理解できない。が、言葉の使用は概念を生み、財産 *Eigentum* がもたれ、土地がその対象となつてくると戦争が行われるようになり、奴隷所有が始められてくる。ここにおいて人類は階級的な社会を生みだし、支配するものと支配されるもの、財産をもつものともたないものに分れてくる。「この時代には二種類の人間が存在した。働く人間と働かない人間、即ち主人と奴隷である。」

かくして働かざる人間は、自己の需要を満足させるために、物々交換を行ひだし、商業が成立してくる。この機能を十分ならしめる為に貨幣 *Geld* がつくられ *Geldsystem* が確立されてくる。 *die Erfindung des Geldes* は *Garantien* の、否、彼の全思想体系の中心命題ともいふべきものであり、人類の不幸、罪惡の源はここより発すると考えられているのである。

*Garantien* は断るまでもなく、歴史書ではなく、社会批判の書であり、未来の完全社会への指針を主目的にするものである。しかしヴァイトリンクにとつては、歴史的認

識、歴史的把握が社会批判の基盤となるものであり、それによつてのみブルジョア社会を克服しようものとしたのである。歴史家でない彼の歴史観は、勿論、統一的でも体系的でもあり得ない。しかし、唯物論的基礎の上にたつて、略々歴史を三つの時期に分けているとしてよからう。すなわち、第一には原始的社会 'Urzustand'、第二には財産の成立から現在にいたるまでの時代、'die Zeit von der Entstehung des Eigentums bis zur Gegenwart'、それは同時に不平等と抑圧 'Ungleichheit u. Bedrückung' の時代でもある。第三は Kommunismus の時代、すなわちこれから展開される、彼のいわゆる完全社会 'vollkommene Gesellschaft' である。「完全社会には行政はあつても支配はない。義務はあつても法はない。(悪への)薬はあつても刑罰はない。Eine vollkommene Gesellschaft hat keine Regierung, sondern eine Verwaltung; keine Gesetze, sondern Pflichten; keine Strafen, sondern Heilmittel」と彼はいう。パンと土地がすべての人間にゆきわたり、自然を専断していた時代がすぎ去ると、人類は自由を失ひ、調和が消えさびつていく。自由は一部の人間のも

のだけになつてしまひ、不合理が何の不思議もなく横行しうるようになつてくる。「調和なき社会 Gesellschaft ohne Harmonie」は歴史的に生れてきたのではなくして、創り出されてきたものである。絶対的な国家理念 absolute Staatsideal も本来存在したものではなくして、社会のうごきに応じて、それによつて利益をうけるものが創出したものであるにすぎないし、言語や宗教<sup>⑥</sup>による区分、区別は自由と調和の失われた社会における喜劇であつたとしてゐる。

以上のような前提に立つて、彼は現在社会を批判し、将来のプログラムを作製する。「現在、世界には多様な人間がいる。

- 一、有益な仕事に従事している人、Menschen, die ein nützlich Geschäft betreiben;
- 二、有益でない仕事に従事している人、Menschen, die ein unnützes Geschäft betreiben;
- 三、少しも労働しない人、Menschen, die gar nicht arbeiten;

四、有害な仕事に従事している人、Menschen, die ein

schädliches Geschäft betreiben.]<sup>⑧</sup>

が範疇的に分けられるし、しかも第一の範疇に属するものに比較して、他のものは少数であるにも拘わらず、社会的には大きな力をもっているのを指摘する。これが彼のいう調和と自由の失われた社会であつて、その根源は Geldsystem にあり、歴史的に創作されてきている。不合理、不平等、抑圧が表面に立つた世界は平等な、合理的な、抑圧なき世界にかえさなければならぬ。Garantien と前後して、一八四二年八月十四日の Telegraph 紙に「共產主義原理の政治形態 Die Regierungsform des kommunistischen Prinzip」<sup>⑨</sup>と題する論文をよせた彼は、その中で、「政府は人間を選ぶのではなくして、能力を選ぶことによつて成立させるべきである」と説いているが、現在社会は理性、能力、合理性によつて克服されなければならないと強調し、再び調和と自由をとりもどさなければならない所以を力説するのである。とはいいながら、彼は決して理性の働きによつてのみ、社会的悪の根源を消滅させてしまふと考へたのではない。矛盾した現存社会の指導者を、彼は新しい暴君 Tyrannen とよび、いたるところで、

その存在が社会の不幸な犠牲を強要しているとし、その追放を主張している。「汝は価値なきもの Du bist nicht wert」、「非人間 Unmensch」と罵倒しているし、「暴君よ、消えされ」、「暴君を追放すべし」と絶叫しているが、単に主張することのみによつて暴君なき社会が出現し、現存の社会が「慾求と才能に応じた自由にして調和ある、一切の善の根元となる社会」<sup>⑩</sup>に代る可能性はない。何故ならば、抑圧し、制御し、一切の悪の根源となる少数者の利益を護る社会が、余りにも強く、また権力をもっているからである。この故に、労働者階級が支配する世界をつくり上げていかなければならないのであつて、暴君の追放に始り、社会の再編成に終止する革命の必要性が出てくるのである。「新しい社会秩序に移行していくためには、圧迫された人民大衆が自発的に立ち起らなければならない」<sup>⑪</sup>。「古い既存社会の転覆は革命であり、それによつてのみ進歩がもたらされる」<sup>⑫</sup>。

しからば、それによつて建設された未来社会は如何にあらべきと考へたか。

下積み階級の、というよりも人類の不幸の原因が、労働



の不公平な分配とそれによつてもたらされた財産にあり、その中心を貨幣に認めた彼は、まず何よりも、未来社会から Geld を追放し、Geldsystem を消滅しなければならぬとする。Geld がなくなれば、不幸も罪もなくなつてくる。つまり彼の闘争の終極の目標は財産共同体 Gütergemeinschaft の建設に向けられていたのであり、「この事は働く者が革命を完成することによつてのみもたらされる」と考えたのである。環境や言語のちがいは問題でない。男性と女性の区別もありえない。「友好同盟 Freundschaftsbund」、「あらゆる人々の平等生活 gleiche Lebenslage aller」、「人類の家族的結合 Familienbund der Menschheit」などは未来社会を説明するのに用いられる語であり、その本質を説明して余りあるものといえよう。一言にしていえば、彼が賞讃してやまない太古へ復帰がのべられ、またしばしば批判されるように、平等共産主義 Gleichkommunismus がその根底になつてゐる。このようにする時、すなわち、すべての人が自己の能力と適性に應じて労働するとき、最小限度の労働<sup>⑥</sup>で最大の享樂を樂しみ、生活苦から解放されるとする。

社会組織においては太古への復帰に近い線を考へていた彼であるが、太古の社会と大いに異なる点は科学、技術、合理性の導入であろう。ヘーゲルやシェリングの觀念論哲学を、その觀念的な故をもつて「高貴な、学識高い手品師<sup>⑦</sup>」と皮肉つた彼であるが、正しい哲学は尊重すべきものとしていたし、社会の原理となるものは科学的でなければならなかつた。「共産主義は信仰ではなくして科学、それもその可能性を哲学に前提された普遍的科学 Universalwissenschaft である。……共産主義は社会の幸福に導く、あらゆる科学の理論であり、実践である科学である」といふ。新社会には一定の能力試験が行われ、職業別の組合から選出された委員会があつてその運営に当るのであるが、学者、技術者はその指導的地位につく。逆にいえば、科学的、技術的に最も高度である人によつて、社会の生産および消費の計画が指導される。各人はカードをもち、それに労働量が記入され、労働量に應じて消費が許される。この場合、消費とは唯単に、日常生活に不可欠のもののみをさすのではなくして、酒や煙草といった類から、観劇、音楽会、スポーツを樂しむことまでを内容とするものであり、その人

のカードをみれば、その人間が過去において何をなしてきたか、社会的に有益な人間であるかどうかとも判明してくるのであつて、いわば履歴書でもパスポートでもある。面白いことには、労働量に余剰を生じた場合には、それらの人達が集つて、精神的享樂財として僧侶の如きも養うことができるとしている。<sup>(10)</sup>

要するに、彼の思想は、むしろ啓蒙期的ともいえる正義感、平等論、主智主義の上に立つてゐるのであり、それに空想的社会主義の社会主義理論が加わつてゐる。この面からいへば、彼はフランス空想社会主義者よりもより素朴な論理の所有者であつたかもしれない。

註

① 「時代の要諦」によつて書かれたといふこの書は、多くの手工業職人、労働者の協力によつて成立したといわれる。パリやロンドンからも金銭の支援があり、校正、製本等に労力奉仕をするものもあり、或る労働者は質屋に自分の所有品をおいて、それにカンバしてゐるし、自分の部屋を、仕事場に提供するものもあつた。故にヴァイトリンクもこの書を「私の作品ではなく、我々の作品 nicht mein Werk, sondern unser Werk.」とよんでいる。Garantien は彼の思想の集大成したものであるので、この書のみは、現今にいたるまでしばしば版を重ねてい

るし、ブレンネッケによれば、一八四九年版をきと千部出されつゝである。

② Garantien der Harmonie u. Freiheit, 1955, s. 8.

③ ibid. S. 9.

④ ibid. S. 13

⑤ ibid. S. 41

⑥ Kaufhold; Einleitung, S. XXIV

⑦ Garantien; S. 30

⑧ こうした考を方は Das Evangelium der armen Sünder 中にもみられるのであつて、キリストをこうした社会の復活を考えた人とみなし、そこに自己とキリストの一致を主張してゐる。「キリストは財産に一顧だたしなかつた Jesu hat keinen Respekt vor dem Eigentum」を主要な命題とした彼は、ハンブルに独自の解釈を述べてゐる。(Schraepfer; a. a. O. S. 54fs)

⑨ 後に、世界語を創作しようとしてたり、新宗教を唱えた彼の根拠は注目すべきであらう。

⑩ Garantien; S. 41 なが R. Huch; Alte u. neue Götter.

Die Revolution des 19. Jhr. in Deutschland, Zürich, 1944

S. 204fs

⑪ Kaufhold; S. XVI

⑫ Garantien, S. 144.

⑬ Potjomkin u. Molek; Die Revolution in Deutschland 1848—49 S. 21

- ①② Garantien, S. 70.  
 ①③ Kaufhold, S. XXIII  
 ①④ 彼が未来社会で必要としている労働時間は六時間である。ただしそれは科学的根拠から割りだされた数字ではないらしい。  
 ①⑤ Vollender: Von Machiavelli zu Lenin, S. 219.  
 ①⑥ Brennecke; Am Tor der Zukunft, S. 110  
 ①⑦ Vollender; a. a. O. S. 217fs

## 五、ヴァイトリンク——その位置——

以上の簡単な紹介からも明らか如く、彼の思想の前提には、明かにフランス空想社会主義の影響があり、古代社会の考え方にはルソーをさえ想起せしめるものがある。「ヴァイトリンクは、商業の批判にあつてはフリーエの影響をうけ、科学（能力）においてはサン・シモンに根ざしているといわれる。さらに財産のあつかいにおいてはブルードンの上に、貨幣の問題はオウエンに負うている」といわれるし、革命の主役にルンペン・プロレタリアを考えた点はバブーフに学んだともいわれている。つまり彼の思想は、従来から考えられていたものをよせ集めたものであるにすぎず、精神的に独立したものでないという非難があ

る。確かに彼のいうところのものは大部分、先人によつてのべられてきたものであつて、彼独自の思考はほとんどみられないといつても過言ではないであらう。例えば、遠くフランスに求めるところはなく、ドイツのユートピア社会主義の先駆者ともいへきフンリヒ O. W. Frölich は、一七八二年に、「人間とその諸關係について Über Menschen und seine Verhältnisse」なる論文におきて、「財産は多くの、大悪の源である。……若し私有財産をやめることができるるとすれば、罪の大部分は消え去つてしまふだらう」といつているのであつて、彼の財産論はこれよりヒントを与えられたものであるとされている。<sup>④</sup>

要するに彼は「神秘性の混在した素朴な平等共産主義を信じていた」<sup>⑤</sup>のであつて、サン・シモン、フリーエ等が彼の思考素材になつてゐることは否定すべくもない。彼における歴史把握は観念的であり、具体的でないし、未来社会は楽観主義の上に成立した夢想社会をしかえがいていない。このような点からいつて、彼がユートピア的であつたところならば、それはその正当性を主張しうるであらうが、このことから直ちに、彼と空想主義者とを同一のイデオロギ

一の所有者と断定するのは危険であろう。彼の思考素材になつたものと彼自身はあくまでも区別されなければならぬ。いし、そのためには、彼が如何なる立場に立つて、どのような環境のもとに、誰を対象にしたかを省察する必要が残るであらう。

メーリンクはヴァイトリンクについて次の如く語る。すなわち、「ヴァイトリンクは或る程度プロレタリアートではあつたが、しかしなお職人である。彼は常にプロレタリアートへの傾斜をしめしはじめていた小ブルジョア階級に属していたし、またその故に、はつきりとしたプロレタリア的な階級意識をもてなかつたのである。……彼は小ブルジョア階級の出身であつたので、プロレタリアートのものつ特別の歴史的生命について何も知らなかつた。彼の理論の根柢は、常に、フランスの社会主義史の上に主役を果している平等である」と。メーリンクはヴァイトリンクをプチブル階級の人と規定している。しかしながらこれは大きな誤であつて、このように解釈する時には、彼は空想主義者と全く同質になつてしまわざるを得ない。断るまでもなく、空想的社会主義はその立場をプロレタリアートの上に

ではなく、ブルジョアジーの上におく。彼らは貧困者の解放をいうが、プロレタリア自身の、社会の発展法則による解放をいうのではないとして、いわばブルジョアジーが、窮局的には自己の利益をまもるために、恩恵的に、上から救いの手をさしのべているのであつて、近代社会、資本主義、階級闘争はその理解の外にあるものといわざるをえない。社会矛盾の解決をプロレタリアの下からの力によつて果すのではなく、小市民的知識人の頭脳の中で、極めて道徳的に果そうとする。

ヴァイトリンクも道徳論を越えるものでなかつたといわれてゐるし、「資本主義のもたらせた社会生活の発展法則の科学的認識にはいたらなかつた。」従つて、革命の意味が極めて曖昧にならざるをえず、メーリンクのいうように「富める者に対する貧しい者」という程度の把握しかできていないということも、あながち否定し去ることのできな面をもつてゐる。彼が革命の推進力としてルンペン・プロレタリアに期待したのも、バブーフ流の戦術という他に、社会構造の把握の仕方に問題があつたという風ということも可能ではあろう。

しかし、ここで注意しなければならないことは、彼の資本主義への理解、プロレタリアの意義、従つて革命戦術などの点で、未熟であり、不徹底ではあつたが、階級的立場に立つていた点である。「我々の敵と妥協することによつて、何か達成できるなどと信じてはならない。我々の希望は我々のサーベルだけである。我々と彼らとの妥協は、我々に不利益をもたらすのみである」という彼の言はこの点を明確にしている。ルイ・ブラン、ブルードン、カベールを支配階級と政府に貧困階級の解放を訴えた者として評価はするが、それらは結局、彼を満足させるものでなく、カベールやオウエンの作品に刺戟されたが、無意義に終つたと述べるのである。ブルノー・バウエルはヴァイトリンクをカベールの追従者と規定しているが、カベールが下積み階級の側に権力を渡すことを拒否し、「権力によるのではなく、奸策によるのではなく、漸進的に、同意により、説得により、理解によつてのみ」社会改革を考え、革命的行動をしりぞけ、所有者階級の正当性感覚に訴えているのとは根本的に異なる。「ヴァイトリンクはカベールに追従した人でないばかりか、これら小市民的改革者の敵でさえあつた。」<sup>⑩</sup> 結論的

にいえば、ユートピア社会主義者がその小市民性の故に、革命 Revolution ではなく、改革 Reform を希望したのに対して、ヴァイトリンクはそれらを素材としながらも、革命を主張し、「フリーエ、サン・シモン、オウエンのユートピア体制の最も鋭い敵<sup>⑪</sup>」であつたのであり、ユートピア主義者をはるかにこえるものであつたといわなければならぬであらう。<sup>⑫</sup> マルクスが Garantien を高く評価したのもこの故である。

こうした階級性は、彼が直接の、そして当面の敵とした「青年ドイツ」、「青年ヨーロッパ」や、「真正社会主義者 wahren Sozialisten」との対比の際にさらに明確にとらえられる。スイスにおいての彼の直接目標は、マル・Marr、ドレック Döcke、シュタンダウ Standaun に率いられた「青年ドイツ」の小市民性に向けられた。ヴァイトリンクを中心とするドイツ手工業職人と対立することによつて、「青年ドイツ」はそのブルジョア主義を明かにし、ドイツ古典哲学の方向に走っている。この派の人々をはるかに高い教養をもち、国民主義の基礎の上に立つている。それはエンカーや大ブルジョアの利益を代表するものではなくして、正し

く小ブルジョアの知識層の理念を代表しているものがあった。ヴァイトリンクの活動は、直接にはこれとの争いであり、その活動を通じて生れたのが *Garantien der Harmonie u. Freiheit* であり *Das Evangelium der armen Sünder* であつた。「義人同盟」や「ドイツ労働者教養協会」の一派としてマルクス主義と争つた「真正社会主義」についても同様のことがいえる。グリューン Grin、ヘス Hess、ピュートマン Püttmann、リュニク Lünigなどを代表者とする「真正社会主義」は、四十年代のはじめ、小市民的知識層、一部には手工業者の間にさえ、新しいイデオロギ―として伝播していつた。空想的社会主義の文献をむさぼり読んだ彼らは、「あたらしいフランス思想を彼らのふるい哲学的良心と協和させ」、「彼らの哲学的立場からフランス思想を自分のもの」にしようとしたのであつて、「フランスの社会主義的および共産主義的文献は、こうして完全に去勢され」、「プロレタリアートの利益ではなくて、人間の、人間一般の利益を代表したいと思ひこんだ。そのじつ、その人間はどの階級にも属さず、まつたく現実のものではなく、ただ哲学的空想のおぼろな世界に存在するにす

ぎないものであつた」<sup>(8)</sup>し、その結果、「真正社会主義はドイツ・ブルジョアジーとたたかう政府の武器となると同時に、また直接には、一つの反動的利益を、すなわちドイツの小市民層の利益を代表した。」<sup>(9)</sup>彼らは「階級闘争の代りに、一般的な兄弟的結合 Verbrüderung や愛を説き」<sup>(10)</sup>ドイツにはフランスやイギリスのたどつたような資本主義は存在せず、従つて、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争はあり得ない、と主張した。かくして「真正社会主義」を一方の側とし、マルクス、エンゲルスとヴァイトリンクをもう一方の側とする対立が開始されてくるのである。<sup>(11)</sup>

以上の点よりみて、メーリンクがいうように、彼を小市民的と規定することや、従来支配的に採用されてきた説、換言すれば、彼をフランス空想社会主義者の単なる模倣者とする説は否定されなければならないであらう。けれども、彼が小市民的理論と対立しているということは、彼がプロレタリア的であつたということを意味しない。彼にあつては、階級対立、革命、平等などが主要な概念であつて、この故にこそ小市民的なるものと異なるのであるが、いうまでもなく、資本主義の根本的分析にまではいたつていない。

公平なる分配ではなくして、生産の共有をもつて、科学的社會主義がその獨自性を主張し得るものとするならば、ヴァイトリンクにおいては、それは余りにも曖昧としていたといわねばならず、後のマルクスとの袂別はここに起因しているのである。しかも社會の科学的分析が欠除してゐたために、彼のセンスは、あくまでも彼の出身であるプロレタリアートのな手工業職人のそれを出てゐない。極端に言えば、古いツンフトの、また、没落して行く者の、過去を懐しむ姿が混在し、手工業者の古い見解を印象づける。陰謀的、ヤントの戰術 konspiratorische u. sektiererische Taktik を続け、コントマーネ的な、或は僉事共團体的な社會の復活を考えたのは、彼の著作のいたるところにその跡を見出しうる。ここに彼の最大の批判をうけなければならぬ、同時に、彼の限界ともいふべきものを見出しうるものではあるまいか。

註

- ① Kaufhold; Einleitung, S. XX.  
 ② Potjonkin u. Molok; Die Revolution in Deutschland 1848-49, S. 21.  
 ③ Kaufhold; S. XIX-XX.

④ Das Evangelium der armen Sünder は、革新的なカトリックの簡ラムネ Lamennais によるところが大であるといわれる。勿論ラムネは非産主義を社會主義には反対するが、ルソーの自然法理論により、サタンの世界と支配階級が土地と人を支配する關係を説き、労働するものが権力をもつて、所有の不公平をのぞき、すべての人の自由にするべきだとした。ヴァイトリンクはラムネの著書の一節を Das Buch des Volkes と題して訳してゐる。

- ⑤ Brenecke; Am Tor der Zukunft, S. 98-99.  
 ⑥ Potjonkin u. Molok; a. a. O. S. 122.  
 ⑦ Mehring; Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, Bd. I, S. 67.  
 ⑧ Kaufhold; S. XXXIII.  
 ⑨ Mehring; a. a. O. S. 71.  
 ⑩ Kaufhold; S. XII.  
 ⑪ Garantien der Harmonie und Freiheit, S. 294.  
 ⑫ Kaufhold; S. XIII.  
 ⑬ Ibid. S. XXXIII.  
 ⑭ その他ブランキと比べた場合、ブランキは小範圍のグループの行動を問題にしてゐるが、ヴァイトリンクは全階級の行動を問題にしてゐる。勿論後に述べるように、それは彼においては、多分に前プロレタリア的な手工業者を中心にすべきものであるが、  
 ⑮ 彼が貨幣をもつて、悪の根源と考えたのはすでにこのへたが、これはオウチンやフレリエの單なる模倣ではなく、階級性から

でたものともいえる。というのは、当時、チャーチスト運動の中にもみられるように、機械の出現が失業をまねき、不幸や貧困の原因になるとする考えが一部にあつた。これに対してヴァイトリンクは、機械は人類を幸福にするものであつて、むしろ、金力をもつて、人を支配することが悪の根源であると考へた。「富めるものと、貧しきもの」という対立を強調する背景には右のような事情がある。

⑭ マルヒエン選集第二巻下、五二一頁。

⑮ 同書、五二三頁。

⑯ Potjonkin u. Molok; a. a. O. S. 22.

⑰ Kaufhold; S. XIV.

⑱ Potjonkin u. Molok; a. a. O. S. 48.

## 六、結論と展望

「三月前期 Vormärz」において、Einheit und Freiheit はさまざまのニュアンスをもつて受取られた。絶対主義的な君主連合であるドイツ連邦の存在、資本主義への転換という事実の前に、Demokraten, Liberalen, Radikalen, Sozialisten, Kommunisten などとよばれる人々が、それぞれの階級的利害を背景に出現してくる。

「第四階級は数の上でなお弱く、未発達である。……ヘルリンでさえも、当時（三月革命期）、第一義的には手

工業者の都市 Handwerkerstadt であつて、労働者の都市

Arbeiterstadt ではない」<sup>①</sup> 従つて、「この時代の社会的プ

ログラムがまず第一に手工業に適應しようとした」という

ことは注目しなければならない。シュターデルマンがいう

ように、当時のドイツで用いられる第四階級なる語には、

僅かなプロレタリアートをはじめ、没落した手工業の親方、

ルンペン・プロレタリアなどを含んでいるのであるが、少

くとも三月前期から三月革命にかけて、量的にイニシアテ

ィヴをとつたのは、前プロレタリア的な手工業者であつた

というのが、未成熟なドイツ資本主義から発生する実状で

ある。手工業職人は故園を後にして出稼ぎ、腕をみがくの

が常で、その中心地がパリであつた。ヴァイトリンクの時

代、パリには五万ないし六万人のドイツ手工業職人がいた

といわれ、その地で空想的社会主義をはじめとする新しい

思想、運動を学び、識つた。これと平行して、インテリ的小

市民的な Linkradikalen もフランス、スイスからドイツ

の Einheit u. Freiheit 運動をすすめている。一方、国際的

視野においては、資本主義は成立期を脱して成長期に入つ

ているのであり、この故に近代プロレタリアートは階級



意識をもつて、自己の組織と理論を整備してくる。いうまでもなく、その先頭に立つのがマルクス、エンゲルスである。

ヴァイトリンクの歴史的背景は正に右のようである。彼が彼の理論を述べるにあたつて、主としてフランスの空想的社会主義者から借りたのは、当時のドイツ手工業職人一般、および彼の経歴からいつても当然のことである。しかしながら、彼が属しているのは手工業職人であつて、ユーロピア社会主義者とは社会的にみて、基本的に異り、しかもそれは近代労働者そのものでもない。ここにおいて彼は、空想的社会主義者とは異なる立場に立ちながら、プロレタリアの理論からも疎外されねばならなかつた。ヴァイトリンクを除外することによつて、「共產主義者同盟」に成長していく姿、三月革命に際して、切角アメリカから帰国しながら、何の効果も示し得ず、再びアメリカに渡る彼の姿はこれを象徴するものではなかつたか。実践活動においても、小ブルジョア主義者との対決が強調されているが、それも *Einheit u. Freiheit* 運動の実体を提示していたといえよう。

三月革命は一般に、半封建的、絶対主義勢力に対する

ブルジョア革命として理解され、革命の進展とともに、自己の利益が侵害されるのを恐れたブルジョアジーが反革命勢力に加担することによつて、革命勢力は力を失ひ、反革命が成功する未完成な市民革命に終るといわれる。が、上にみってきたように、大ブルジョア、小ブルジョア、第四階級の間には、革命勢力として結集する条件が、はじめから欠けていたのではないであらうか。 *Einheit u. Freiheit* なる大きな目標の前に、革命の勃発に際してこそ一時的に結集し得ても、それは全く瞬間的で、各々の *Einheit u. Freiheit* 解釈のニュアンスの相違は根本的に消し去ることのできないものを含んでいたのであり、この意味では、革命の結果からする「未完成な革命」とするよりも、むしろ革命達成への条件において、「未成熟な革命」であつたといわねばならないであらう。

それは大ブルジョア、小ブルジョア、第四階級の間には戦線の統一がなされなかつたということだけではない。第四階級自体が、ツンフトの名残から戦闘的プロレタリアまでを含み、その対立にエネルギーを費しているし、第四階級の主力は手工業的でさえある。「資本主義は手工業親方

を単なる自宅職人に転落させ、「一八四八年の歴史は親方がなお依然として古い秩序の方を向いていたのをしめしている」<sup>①</sup>。共産主義者の内容も、ブルシェンシャフト左派の伝統を受継いだ「白き手」のものと、「油の手」のものとの間には冷い闘争が存在する。また更に、革命勢力と農民との関係も極めて不十分である。このようにみてくる時、三月革命は革命と反革命の対立以前に、ドイツ社会の現実を反映して、革命勢力の中に対立を含み、自解していく面が多かつたのではあるまいか。

註

- ① W. Mommsen: Grösse und Versagen des deutschen Bürgertums, Stuttgart, 1949, S. 156.
- ② ibid. S. 157.
- ③ Stadelmann: Soziale u. politische Geschichte der Revolution von 1848, S. 155fs.
- ④ Obermann: Die Deutschen Arbeiter in der Revolution von 1848, S. 35fs.
- ⑤ ibid. S. 38. その多くはヴァイトリント同様、仕立職人である。
- ⑥ K. Obermann: Einheit und Freiheit, Berlin, 1950, S. 30 fs. A. Meusel: Die deutsche Revolution von 1848, Berlin 1948. その他を参照。なお松田智雄「近代の史的構造論」九八

頁以下をみよ。

⑦ J. H. Clapham: Economic Development of France and Germany 1815-1914, Cambridge 1951, P. 323.

(本稿は昭和三十一年度、科学研究助成金による研究の一部である。)

執筆 者 紹 介

小林 行雄	京都大学講師
広実源太郎	和歌山大学助教授
押野 昭・生	京都大学大学院学生
黒田 俊雄	神戸大学講師
上田 正昭	立命館大学講師

# Sphere of the Early *Yamato* (大和) Dynasty

By

Yukio Kobayashi

Judging from the analysis on the 'share-portion of *Dohankyo* (同范鏡), it is found that the distribution of *Sankakuensinjukyo* (三角縁神獸鏡) in Japan consists of two sections, one is eastern and the other western type. Though the mirrors of western type stand for the existence of one civilization, the distribution of the eastern type mirrors consists of the two stages, the first stage of which was within the culture of western type and the second stage of distribution was after its developing to the east. Cultural sphere of the western type means the influential sphere of the *Yamato* (大和) Dynasty about 300 A. D., which was not extended to the east until the fourth century.

## Der Sozialismus im Vormärz

—Die Werke und der Gedanke des W. Weitlings—

von

Gentarô Hirozane

Mein Aufsatz soll den frühen Sozialismus und die Arbeiterbewegungen in Deutschland als Gegenstand behandeln.

Die ersten Organisationen der deutschen revolutionären Arbeiter entstanden außerhalb Deutschland; in Paris und in der Schweiz. Die Hauptrolle der Bewegungen spielten die Handwerksgelesen, vor allem die Schneider, z. B. auf dem „Bünd der Gerechten“ gesehen. Daher hatten sie den Charakter des französischen Utopisten kennen und veröffentlichte Weitling seine Werke; „Die Menschheit, wie sie ist u. sein sollte“, „Garantien der Harmonie u. Freiheit“ u. s. w.. Ohne Zweifel van Fourier, Saint-Simon und Proudhon beeinflusst, konnte er niemals zur wissenschaftlichen Erkenntnis der Entwicklungsgesetze des gesellschaftlichen Lebens, besonders des Kapitalismus gelangen. Aber man kann in ihn

auch einen der schärfsten Kritiker des Utopismus sehen, denn seine Theorie ist im Grunde auf dem Klassengegensatz begründet.

## Some Suggestions on the “*Humoto*” (麓) Settlements

By

Akio Osino

The “*Humoto*” (麓) settlements, local settlements in old *Simazu* (島津) territory, have been thought to be of *Kamakura* (鎌倉) or of late-*Muromachi* (室町) origin; but these settlements have been so emphasized as military settlement of the Middle Ages that many students of this problem failed to see the modern character of the settlements. Though depending on mountain forts in the Middle Ages, functionally were the *Humoto* settlements constituted as administrative ones in early modern times, as exemplified in their construction as settlements, their institutions, and their development into local core-settlements as the foundation of villages in the *Meiji* (明治) era.